

人的情報に勝るものはない

——昨今の世界情勢から見た企業の危機管理

人脈と企業間の連携が、国外退避などの迅速なリスク判断のカギを握る。

株式会社 INPEX HSE ユニット
セキュリティ・危機管理グループ

シニアセキュリティアドバイザー **坂田信崇**

在パキスタン日本国大使館で

1994年に陸上自衛隊に入隊し、2016年から19年まで外務省に出向、在パキスタン日本国大使館で警備対策官を務めた。首都イスラマバード中心部は厳重な警備線が敷かれ、家族や邦人が被害に遭う事件はなかったが、首都以外の場所では自爆テロや銃器犯罪、誘拐などが連日起きていた。そのたびに邦人の安否を確認する必要があり、治安機関や病院に問い合わせを行うなど気の抜けない3年間を過ごした。

パキスタンでは大使館員が国内出張する際、事前のセキュリティ調査が必須になる。調査は治安、経路および施設の3つが柱で、経路と施設の安全性は経験に照らして評価できた。だが、刻々と変化する治安情勢の評価は一筋縄ではいかない。治安機関に表から尋ねても、「(俺たちがいるから)治安は大丈夫」との返事ばかり。



パキスタン名物 走る芸術「デコトラ」

り。こうした場合に頼りになったのは、他の大使館で働く警備担当者や、進出日系企業の関係者、公式行事などで知り合った財界人、軍幹部など、現地情勢に通じた人たち。日頃から連絡をとり、食事をするなどして信頼関係を築くことを重視した。各方面から寄せられる話をすり合わせながら、情報の確度を多面的に評価することができるからだ。どんなにITが発展しても、現地の情勢をリアルタイムでつかむ人的情報に勝るものはない。

2019年2月、インドとパキスタンが領有権を争うカシミール地方で軍事衝突が起きた。両国軍が戦闘機を撃墜するなどし、緊張が高まった。在留邦人が国外退避する事態には至らなかったが、この事件を受けて私は、邦人が安全に退避するための計画を見直し、緊急時にどう動いたらいいかシミュレーションを行うことにした。カシミールに近い首都イスラマバードから南部カラチまでの約1500キロの退避ルートを実際に走破し調査した結果、外国人が車列を組んで走行したり、宿に大勢で泊まったりすることは、襲撃や誘拐のリスクを生むと判断。この退避ルートは「利用可能だが十分な注意が必要」と後任者へ引き継いだ。

判断の決め手は生の情報

2020年4月に(株)INPEXにセキュリティ担当として入社。パキスタンで出会った、民間企業